児童福祉施設における職員の資質の向上への取組み「第一報」
―M学園の現状と課題を通して児童養護の今後を探る―

飯田和也
横川　聖
藤田哲也

1　はじめに

最近の乳幼児や児童を取り巻く環境は決して「子どもにとって幸せ」といえる状態とはいえない。幼い乳幼児を大人が平気でころしたり、虐待したり、子どもが子どもを殺したり、子どもが大人を殺したりといった悲惨な事件が日本の各地で起きている実態が見られる。このような社会の中で児童福祉施設が乳幼児や児童にとっての「生きる」ための施設、また「愛される場」として重要性が求められている。今回、M学園における運営方針や子どもを受け入れている背景、実際の事例、さらには保護者の意識調査や実践例から児童養護施設としての実情や問題点、更には課題について検討したい。今回は、M学園という限られた範囲の中での考察であるが、今後の施設の職員として乳幼児への指導や養護のあり方についても検討したい。

2　M学園の運営方針と背景について

M学園は、児童養護施設の目的にしたがって、子どもが心身とも健やかに、自ら未来を創る担い手となるよう、次の諸点について留意し運営している。

1）M学園はカトリック精神である隣人愛に基づき、奉仕と感謝の心を育て、子どもに真の幸福を見つけられるよう教え導く。
2）学園は、子どもの自由度を高め、家庭的愛情の中で育てるため、特別な規則を作らず、一切鐘やベルを使用せず、相互の呼びかけを大切にし、各自の生活に責任をもった自主的行動を願って推進する。
3）学園は、子どもの心身ともに健やかに育てるため、職員の健康に特に留意する。また、常に職員相互の連絡調整を図り、施設全体のマンネリ化を避け活気のある施設となるよう職員の精神衛生を重視して推進する。
4）学園は、子どもの積極的な養育機関として社会のニーズに応えられるよう、また地域における子どもの健全育成の場としての役割を果たすよう務める。
5）子どもは本来家庭にあって、両親又はそれに代わる養育者の温かい愛情を受けて育つべきものであるから、一日も早く家庭復帰ができるよう、養育に備える。
6）学園は民間施設であるから民間独自のよさを発揮し、養育により良い効果を上げるよう努める。
7）学園は大舎制をとり、50名を限度とする。子どもの自主的生活の場を尊重するとともに、個々の子どもを知り、養育の健全化に備えるために、保育士、指導員は男女混合の幼児と小学校低学年を除いて、縦割りの各居室分散方式で担当する。高年齢児については自立支援を目的に、個室での自己管理をさせる。
8）学園は児童養護施設の正しいあり方について研究し、指導内容、方法を評価、検討、反省し、職員の資質向上をはかるとともに、子どもへの愛情と共感、温かいふれあいを持って養育をすすめる。

児童養護施設の子どもたちは様々な理由で親の愛情を直接受ける事ができずに入所してくる。当然のことながら誰一人として施設入所を希望するものはいない。誰もが両親のもとで温かな愛情に包まれて生活することを願っている。しかし残念ながらそのことがかなわず施設入所となる。M学園では、家庭で生活できない子ども達に対して、この学園に来て良かった、この職員と出会えてよ

かったと言える関係を築いていきたいと常に思っている。子ども達は親を選ぶことができない。施設を選ぶことができない。担当職員を選ぶことができない。そうした弱い立場の子ども達が、この世に生まれてきたことに感謝でき、多くの中から選ばれた特別な存在であることが実感できるような関わり、「こころ」を育てる事を大切にしたい。子ども達の幸福を考える時、子どもは本来家庭にあって両親の元で生活できる事が基本であるので、家族再統合に向けて努力する事、また子ども自身にも力をつけていくようにする事が大切である。子どもにとって親はかけがいの無い存在であり、一緒に生活していなくても親をおもう子どもの気持ちは尊いものである。施設を退所後、自分のルーツや入所理由を求める姿がある。親をおもう子どもの気持ちを理解し大切にしながら、親との関わり、親子関係を育てていく。しかし残念ながら家庭に帰れる子どもは決して多くないのが現状である。多くの子どもは高校を卒業して社会に自立していく。子どもたちの幸福は何も施設内で安心できるだけのものではなく、社会に出た時に、自分の家庭を持った時等、どのような生活が送れるかが大きな課題である。社会生活をする中で、最初にぶつかる壁はさびしさである。社会に出て見知らぬ土地で、見知らぬ人に囲まれ、新しい体験のなかで、身近に頼れる人が見出せず挫折する事がある。またそれまで護られた生活の中で、金銭管理、時間や食事等自己責任でおこなうという体験が不足しているために、生活が乱れ、遅刻や無断欠勤、上司との関係が崩れ退職といったことがあり、施設での日常生活の振り返りの必要性を感じた。そのためには生活の中には特別な規則やルールを作らず、ベルや放送といった機会を介さず、直接声を掛けるようにしている。子どもの表情を見て、言葉の抑揚、強さ大きさ明るさを感じることにより、子どもとの関係を深める必要性を実感していきたい。また自立に向けた体験学習や自立棟での自己責任で行う生活体験の場を持つようにする。このように子どもに対して必要な事を必要な対応が出来るよう、民間の独自性を生かし柔軟に対応していきたいと考える。それには職員の理解と意欲が必要となってくる。職員は子どもたちに対して共感の持てるかかわりを通して、子ども達が何を求め、どのような事が必要かを考え実践できるようにしたい。また施設での職員との出会いが、仲間との出会いが生涯の支えとなるような働きかけは、大人である職員の努力と質の向上を目指すことである。少子化を迎えた今日、子ども同士の育ちあい、異年齢の子ども達とのかかわりが希薄になってきている社会の状況の中、施設だからできること、施設でしかできないこと、集団の特性や子育ての専門性を生かしたかかわりを考えていきたい。

また施設のみの狭い範囲で子ども達を見るのではなく、地域を含めた子育て支援という意識を持ち、地域に開かれた施設となり、児童福祉の中心的存在となるよう働きかけていきたい。

児童養護施設、乳児院は単に一定期間子どもが生活する場所ばかりではなく、子どもの人生を左右する大事な生活や学習の基礎を築く時期、子ども達の健全な成長発達を支えるために尽力していくわけであるが、その中の失敗し、学習した事例を紹介する。

事　例　1

A君（中学3年生男子）入所の理由は不登校ということである。家族は本児が五才の時両親が離婚し、父親に引き取られた。本児は父と伯母と3人で生活していた。父親は精神的疾患があり、本児が小学校五年生の時、伯母宅を放火してしまう。その場面に本児もいて伯母に救出される。父親はその後精神病院に入院加療となる。伯母と2人で生活していた本児は、中学2年生から学校に行かなくなり、中学3年生の6月に入所となる。入所後は次の日から登校することができ、夏休みまでは学校を休むことなく行ける。夏休み後1週間たった後、突然朝起きられなくなり、こちらからの呼びかけに対し全く反応がない状況となる。丸1日食事も水分も取らずトイレにもいっていない状況であった。翌日は少し反応が出てきてトイレには行くようになったが食事は一切とらない状況である。その後徐々に反応が出てきて、水分を取るようになり、食事を少しずつとるようになり、会話ができるようになったのが一週間を過ぎた時であった。しかし本児からなぜこのような状況になったのかを話すことはできない状況であった。

今後のことについて心配であり、会議を重ねたが、対応のしかたが見つからないまま、2週間が過ぎた時には、また学校に行くといって登校し始めた。それまでのことが何事もなかったように学校生活が再開した。

その後期間の長短はあるが2ヶ月に一回くらいの周期でこのような状況を繰り返すようになった。高校受験も控えていて、こうした状況が受験と重なったら受験できなくなることを心配して精神科に相談することにした。しかしそうなる前は本児の怠け心がこうした状況になっているのではないかとか、強制的に起こしたり、登校を促したり、時々に試してみた。精神科に相談したことを伯母に話したところ、それまでこちらには話されていなかったが、家にいる時にも定期的に精神科に通っていたとの事、そのことがわかり、それまで通っていた精神科への通院を再開することとなる。その時に医者から、それまでの対応について指導を受け、今後の関わりについても助言をされる中、いかに自分たちが知らずに間違った対応をしていたのかを反省するところであった。

A君は高校に合格することができ、元気に通っていたが、一学期の期末テスト前に病気が再発し、それまでの病気よりひどい状況であったので入院することになる。

途中仮退院があったが、その後バランスを崩し、結局退院したのは3ヵ月後であった。学園へ戻ってきてからの関わりについても、私たちは体験がなかったため、不安がいっぱいであったが、特別扱いをすることなく関わることの大切さを指導していただき、通常の関わりを心掛けた。本児は高校への復帰もしたいとのことがあり、3ヶ月という長期の欠席であったこと、この後病気の再発の心配等色々あったが、本児の気持ちを尊重し、高校へ行き、担任、学年主任、生徒指導の先生と学校復帰に向けての検討を重ねた。全出席日数の5分の1は越えているが、特別な事情ということで3分の1までの猶予を見ることを校長先生の許可をもらい、学校復帰となる。不安の中の復帰であったが、その後学校を休むことはほとんどなく、試験前等は情緒が不安定になることもあったり、行動面の不自然さを感じることもあったが、継続した病院の通院と薬をきちんと飲むことで、入院するほどバランスを崩すことなく高校生活を継続し卒業することができた。就職も近くのお菓子屋に決まり、学園を無事に送り出すことができた。

しかし就職後は、新しい環境、病院への定期的な通院、服薬ができなくなる、バランスを崩し、遅刻、無断欠勤が多くなり、結局職場が首になる。高校時代が今までの人生で一番良かったということで、しばらく学園で生活しアフターケアに取り組んだが、結局伯母の所に戻りたいということで、伯母のところに帰る。その後は病院の入退院を繰り返し、退院後の職場は精神障害関係の授産施設で働いているという状況である。

このケースでは、私たち職員が精神疾患ということの知識や理解が弱く、その対応が間違っていたことが多くあったことを反省することになった。日常生活では施設の職員がからだを張って取り組むべきものであるが、専門家の力を借り、助言指導をしていただく中で、その子どもにあった一番適切な関わりをしていく必要を強く感じた事例である。

子どもとの関わりは、医療、司法、教育、地域、行政等、多くの分野にわたっている。1人の子どもの幸福を考えた時、多くの力が必要になってくるケースも多い。そうした時、福祉の心をもった専門家といかに手を組んでいけるか、また福祉の心を持ってもらう働きかけをいかにしていくのかが、私たちの大きな課題とも言える。

3　指導員としてのかかわり

大学や短期大学などで児童養護に関して勉強をしてくる学生が実習の時にどんなイメージを持って学園に来るのか？少なくとも授業の中で『親の養育放棄や虐待を受けた子どもがいる』と言うことぐらいは学習するものの、養護施設としての具体的なイメージはつきにくいのではないか。

M学園にも年間を通していくつかの大学、短期大学から学生さんが実習に来る。実習のオリエンテーションの時『実習で何を学びたいですか』との質問に、『子どもとの関わりを学びたい』と目標をあげる学生が多く見られる。関わりを学ぶ事……とても重要で大切な事だとは思うが、反面とても難しい。何年か働いている職員ですら、毎日の子どもとの関わりの中で、悩み、苦しんでいる。も

ちろん、苦しい事ばかりではなく、嬉しい、楽しい事も多分にある。

児童養護施設の仕事は、何も子どもと関わることだけではない。子どもの生活の主体は施設にあるので学習面（学校での様子、部活、対外的な関係も含めて）での指導や生活面（健康管理や躾、社会的なルールやマナーなど）での助言・指導はもちろんの事、関係機関とのつながり（行政機関、病院、教育機関等）親とのつながり（面会、外出、帰省等）卒園生とのつながり（卒園後のアフターケア等）地域とのつながり（清掃活動地域行事への参加等）学園内外の環境整備や園内行事の計画・実行、書類作成等…挙げてみるときりがなく毎日が過ぎてゆく実態がある。

その様な生活の中で、職員は子どもとどの様に向き合い子どもとの関わりを持っているのかを、アフターケアを含めた実践例を通して検討したい。

事　例　2

【Ⅰ　私と入所児童Ｋとの関わりを通して】

Ｋは高校１年生。小柄で色白な男の子ではあるものの、スポーツは大好きなようで野球やサッカーをよくしていた。Ｋは車やバイクにも興味があって、雑誌もたくさん持っていた。私との関係も、そんなスポーツや車の話から成り立っていった。

Ｋが入所してきたのは、Ｋが小学校４年生。兄弟はＫの下に妹が２人いる。同時に入所した。

入所理由としては、両親の離婚による養育困難。近くに母親も生活しているものの、養育できる状態ではなかった。

Ｋのケースを当時は読まなかった。なぜならば、ケースを読んでしまうとＫのイメージよりも先入観で関わってしまうからだ。（もちろん処遇をしていく上では情報は必要であるため、後々読むようになるのだが……）Ｋはとても優しい子どもで特に幼児の面倒をよく見ていた。園内の修繕の手伝いもよくしてくれていた。網戸張り、ペンキ塗り日曜大工等々……。高校１年から２年生にかけてＫ自身そんなに目立った存在でもなく、学校の成績もクラスでも10位以内と大変良かった。

そんなＫの行動が変化していったのは、高校１年も終わる３月頃だった。

最寄りの駅から自転車を勝手に乗ってきてしまったり、嘘をつく事が多くなった。

Ｋの持ち物が増えたのもこの頃からで、お小遣い以上の物が増えていく。私が話を聞くと、始めはごまかしていたものの、結局学校の先生の引き出しからお金を取っていた事がわかり学校謹慎となる。『盗みはいけない事』と言う事を教える事も大切だが、『なぜいけない事なのか』をきちんと説明してあげる事が必要と感じた。

学校謹慎が解除になるというやさきに、同じ先生からまたお金を盗んだ。叱ることがいいことなのか？Ｋが『してはいけない』と自分の心にブレーキがかけられるようにするにはどうしたらいいのか？職員同士で悩む日々が続いた。Ｋとの関係をもっと身近なものにしたいと考え、一緒に作業をする中で会話をしたり、図書を勧めてみたり、するものの、Ｋが何を感じて、なぜ盗みを繰り返すのかは分からなかった。

高校２年生の夏にはアルバイトを始める。念願のガソリンスタンドでのアルバイト。Ｋには、生まれつきの持病があり、なかなかバイト先でも受け入れてもらえなかった。高校卒業してからの進路もガソリンスタンドにと考えていたので、いい経験になって欲しいと望んだ。

しかし、半月くらい経ってＫがレジのお金を盗んでタバコを買っていたと言う事実が分かる。事実を確認し、私と担当保育士とＫが謝罪に伺う。目の前で大人が謝罪することがＫの気持ちの中でどの様に映るのか……。

この件で、再度謹慎となりＫが園内で作業をする時間が増える。作業に関してはとても丁寧で確実に行う。職員から誉められると、とても嬉しそうな表情をする。

いくら作業を繰り返しても、叱っても、怒っても、助言しても……Ｋが何を感じどう思っているのかがつかめなかった。

高校３年。就職活動も本格化してくる中で、Ｋはガソリンスタンドの面接を受ける。結果は見事合格するものの、持病のことを指摘されて合格取り消しとなる。

父親が音信不通、母親も半年ほど前に亡くなってしまったために、卒園後の進路についてどう助言していけば良いか悩んだ。

そんな時に、母親の実の妹と名乗る女性が現れ

る。零細企業ではあるが、会社を経営しており、Kのやる気次第で採用すると言ってくれた。Kにも確認をして、無事に採用が決まると共に、4月から地元を離れての生活が始まった。

【Ⅱ　関わりの中での問題点とその背景】

Kとの関わりの中で、非常に悩んだのは、同じ事を何度も繰り返すと言った事がいくつもあった事にある。盗み、喫煙、嘘…そんな行動を取る度に、助言や指導が多くなった。もちろん、その様な状況の中でも、Kの良い所を伸ばしていこうと興味のある事に取り組んでみたり、行動を誉めてあげたりと方法を変えては関わりを持った。しかし、その期待は大きく裏切られてしまうかの様に、見事に同じ事を繰り返す。

その度に、私たちの感覚の中では『なぜ？どうして？』と言う思いになり、自責の念にかられてしまう。ではなぜ、この様な状況をKは作り出してしまうのか？そこにはKが生活してきた生育歴や園内で生活の中にヒントがあるような気がする。

一般的に、家庭と言う小集団の中に、夫婦が存在しその愛情によって子どもとの愛着関係が成立している。小学4年生から入所してきたKにとって、幼少期の愛情が十分ではなかった気がする。

また、親権は母親にあるものの、母親の精神疾患による母性愛の欠如も考えられる。小学生という年齢から考えても、母性愛をいっぱい感じたい時期ではあるが、そこが欠如していたためにK自身の事を少しでも誉めてくれる、認めてくれる女性に対しては、Kが勘違いしてしまい特別な感情を持ってしまっていた。

その様な状況から、対人関係に関してスムーズにいかず、同じ歳頃の友人が少なく年下と遊ぶ事が多かった。同じ歳の友人が少ないため、園内では幼児と一緒にいる事が多かった。Kの存在が受け入れられる唯一の場所であるとともに、Kが心から落ち着ける、癒される場所の一つであったのかもしれない。

園内での存在のなさから、『自分を見て欲しい』と主張する動きが多くなってきた。学校でも学園でも自分の存在や居場所を作るために、他人よりも目立とうとする動きもでてくる。

そこがお金を盗むと言う行動につながったり、嘘をつく事につながったりしていったのではないか。

また施設のシステム的なものも要因の一つに挙げられる。職員の入れ変わりがあることから、Kも担当の保育士が変わることが多かった。『ずっとあなたを見ているよ』と言うサインを送っているにも関わらず、Kがそのサインを受け取っても担当が変わってしまえば、Kは誰を信じたら良いのかも分からなくなってしまう。もちろん、どの職員も同じ子どもを担当したいと言う思いはあるし、子どもにとってもそれが理想であると思う。が、職員配置やシステム上の問題、子どもとの関係においてやむをえず担当を変えなければいけないと言う状況になる。そこにジレンマを感じる事が多い。

簡単に要因をまとめると

① 幼少期における母性愛の欠如と関係の薄さ
② 対人関係の難しさからくる存在感のなさ
③ 一生の関わりができにくい、職員体制からくるシステム上の問題。
④ 面会、外出等、入所以来家族関係が全くもてておらず、親子関係が成立していない。

以上、全てこの項目にあてはまると言う事ではないが、家庭においてどれも必要不可欠なものばかりである。

【Ⅲ　アフターケアの現状と課題】

児童養護施設は、2歳～18歳までの子ども50名が職員と一緒に生活している。

満18歳に達した子どもは、誕生日より3月31日までは措置延長と言う手続きをとり、その後の進路に向けての準備をする。多くの場合が高校卒業後の進路は就職であるが、中には大学、短期大学、専門学校に進学する子どももいる。

卒園後は学園の生活から、家庭に戻り一緒に生活をして働きに出る場合と、会社の寮やアパートに1人で生活し通勤する場合がある。

前者の場合は、保護者が責任を持って卒園後の対応をしていく事になるが、後者の場合は卒園した後も施設が子どもに関わっていくケースが多い。（これをアフターケアと言う）ここでは、卒園生Bとの関わりを通して、アフターケアの現状と課題について考察する。

《卒園生Ｂについて》

Ｂ（男性）は乳児院からの措置変更で児童養護施設に入所となる。兄弟は兄が二人いるが、Ｂとは直接面識はなく、存在すら分からない状態であった。父親は小さい頃に死別。母親に引き取られるもＢを養育する気力がなく乳児院への措置となる。

母親との関係は、児童養護施設入所後の面会などは全くと言って良いほどなく、帰省の通知や連絡をしても断られる事が多かった。

そんなＢは昔から生活していた事もあり、職員や子ども達からとても人気がある存在である。

Ｂは知的発達において遅れがあり、日常生活を送る事には問題ないのだが、読み書きには年齢にそぐわない事が多い。

Ｂは夜間の定時制高校に入学をし、昼は土木関係の仕事、夜は学校の生活をしていた。しかし、仕事の疲れと、能力の遅れから授業を受けられず中途退学となる。

その後、土木関係の仕事は続けるものの先輩からの助言や注意を聞く事が出来ずに、会社を首になってしまう。

運転免許の取得を目標に取り組む時もあったが、問題集を見ても漢字が読めなかったり、言葉が出てこなかったりと、試験どころではない状況も続いた。Ｂも来年には卒園して社会に出なければいけない。しかし、今の状況では仕事も見つからず先がとても不安であった為に、社会体験の一環として、自立棟（指導員宿舎の一室を借りた自立援助ホーム）での生活を始める。

そこで、１人での生活を体験し、生活費の使い方や食事など今後Ｂに必要と思われる術を経験していった。同時進行でアルバイトではあるものの、アルミ加工の工場で働く事ができ、自立棟から会社へ通勤する。

自立を目前にして、今まで音信不通であった母親から、Ｂあてに連絡が頻繁にあるようになった。『卒園したらＢと一緒に暮らしたい。今までやってあげられなかった事をしてあげたい』Ｂと母親の関係は全くと言って良いほどできていなかったので、まずは関係づくりから始めていき、Ｂの気持ちも尊重しながら見守っていく事とした。

Ｂが卒園を迎えるにあたって、会社の課長とＢの今後について話を持つ機会があった。以前の仕事場でもいわれた事が、そのまま課長からも話があった。しかし、Ｂの今後への不安、施設での状況を分かってくれた上で、卒園後の仕事についても面倒を見ますと言ってくれた。

４月から工場の近くのアパートで１人暮らしが始まる。はじめの一週間は会社にも真面目に通勤していたが、半月を過ぎた頃から会社へも行かず、連絡も取れなくなった。

結局、この仕事も首になり、Ｂはアパートを出て行ったまま、行方が分からなくなってしまった。そこからまた半月が経ち、Ｂから連絡がある。『生活費がなくなったので、貯金をおろして欲しい』在園中から仕事をしていたために、貯金はあったので、生活費として現金を渡す機会が何度かあった。しかし、Ｂだけがそのお金を使っているのではなく、背後にはＢを脅かす大きな存在があることが分かる。

現在はその存在とは縁を切り、別の卒園生と生活をともにし、仕事を続けている。

【Ⅳ　アフターケアの課題(Ｋとの関わりを通して)】

アフターケアでまず問題となってくるのが、社会に対する個人の適応能力の有無である。

在園中に、卒園後の生活についてどこまで考えて関わっていけるかは、大きなキーポイントになると思う。個人の能力や、適応力、人間関係等を見ながら、本人の意向も踏まえたうえで、進路選択をしていく。Ｂの場合、能力がボーダー付近であった事、高校卒業の資格が取れなかった事など、就職するにあたって不足の部分が多かった。しかし、高校にも行かず、そのまま園内で生活していく事は出来ないとしたら、何とか就職を探して社会性を身につけて欲しいと願うのは当然である。

しかし、こればかりは社会に出てみないとどの様な状況に巻き込まれていくかは予想も出来ない。よってアフターケアが大切であり、ある程度生活に慣れるまでのケアが必要となってくる。

次に、Ｂを含めて施設の子どもの中には、失敗を知らない子ども、失敗を体験しない子どもがいる。職員は子どもが何らかの問題行動を起こした時、その責任を突きとめる事をし、その問題の大きさについて反省させたいと思う。しかし、最終的には関わりの中でその子を信じたいと思い、何

とかしてあげたいと言う感覚から失敗する前に救ってあげてしまう。子どもは救われた体験が多くなると、誰かがいつかは救ってくれると思ってしまい、なかなか自己反省ができにくくなってしまう。

例えば、生活費を渡した後、それを自由に使い込んでしまえば生活が苦しくなるのは当たり前の事で自分が何とかしなければいけない。しかし、施設での体験の場では生活費がなく、苦しんでいる子どもを見て、ほかっておく職員は少ないだろう。「仕方ないなあ。今回だけ」と言いながら何らかの手を差しのべてしまう。これは職員において当たり前の感覚なのだが…。失敗体験をいかに多くして、それを人生において成功に導いていくという術を学ばしていく必要があると思う。

そして、就職をしていく上で、非常に限られた門戸しかないのが現状である。自宅から通う場合宿舎等は考えなくてもよいが、保護者を頼ることが出来ない場合も多い。そうなると、自分のやりたい仕事があって宿舎があるような好条件は簡単には見つからない。そして、少なからず貯金はしてきているものの、一人で生活するにあたって経済的な負担も大きい。施設側が、自立するにあたって経済的な援助がどこまでできるか又、子どもにその様な意識を持たせる事がどこまで出来るのかも課題となる。

実際に社会に出て、活躍している卒園生も多くいる。結婚、出産の報告もしてくれる。アフターケアは大変ではあるが、卒園生の頑張っている姿をみて嬉しくなる事とともに、その頑張りに励まされ、勇気付けられる事も多い。取り組むべき課題は多いが、子どもが成長していく姿を見れる良い機会になると思う。

4　保護者の意識調査から

日常の関わりとは、子どもとの関わりが主体的で、保護者と関わりを持つ機会と言うのは少ない。

例えば、学校関係の行事の時、夏休み・冬休みの帰省、面会時などと限られた時間のみとなってしまう。しかも、全ての職員と話が出来ることが理想ではあるものの、子どもがいる中では難しい。

そこで、面会時や帰省時に来園された保護者の方々（祖父母・父母・親戚関係等）にアンケート調査を行いその結果を職員が知り得る事で、保護者の方々の思いや、要望を汲み取る事ができ、子どもの支援並びに関わりに反映できると考えた。

対　　象：学園に来園された保護者の方全員
実施期間：平成16年4月1日～
実施時間：面会時の10分～15分程度
アンケート実施状況

趣旨を説明すると、保護者の方からも『今までこう言う事がなかったので、書いてみたいです』『口ではなかなかまとめて言う事が難しいですが、文章にすると伝えやすいかも…』と言う声があがった。

アンケート内容と選択肢

1、施設に入所する前と現在では、子どもが変わりましたか？《　はい　・　いいえ　》
2、《1で『はい』と答えた方》どのくらい変わりましたか？（複数回答可）
　a. 大変よくなった　b. よくなった
　c. 悪くなった　d. 大変悪くなった
3、《1で『はい』と答えた方）》どんなところが変わりましたか？（複数回答可）
　a. 健康面　b. あいさつ　c. 好き嫌い
　d. 勉強面　e. 運動面　f. 性格　g. その他
4、入所前は、施設に対してどんなイメージを持っていましたか？（複数回答可）
　a. 暗い　b. 冷たい　c. こわい　d. 明るい
　e. 温かい　f. 優しい　g. その他
5、入所後、施設に対してのイメージは変わりましたか？《　はい　・　いいえ　》
6、《5で『はい』と答えた方》どのように変わりましたか？（複数回答可）
　a. 暗い　b. 冷たい　c. こわい　d. 明るい
　e. 温かい　f. 優しい　g. その他
7、現在、職員に対してのイメージは入所時と変わりましたか？《　はい　・　いいえ　》
8、《7で『はい』と答えた方》どのように変わりましたか？（複数回答可）
　a. 暗い　b. 冷たい　c. こわい　d. 明るい
　e. 温かい　f. 優しいg. その他
9、子どもに期待する事は何かありますか？
　《　はい　・　いいえ　》
10、《9で『はい』と答えた方》あるとすれば何ですか？（複数回答可）

a. 健康面　b. あいさつ　c. 好き嫌い
d. 勉強面　e. 運動面　f. 性格　g. その他

11、学園や職員に望む事は何ですか？
（ご自由にお書きください）

12、お子様を預ける時の気持ちは、どのようなお気持ちでしたか？（複数回答可）
a. 悲しい　b. 辛い　c. 淋しい　d. 悔しい
e. 嬉しい　f. 恥ずかしい　g. その他

13、面会をされる時のお気持ちはどうですか？
（複数回答可）
a. 楽しい　b. 嬉しい　c. 恥ずかしい
d. 面倒臭い　e. 仕方がない　f. その他

14、子どもにしてあげたい事は何ですか？
（複数回答可）
a. 精神的な援助（電話、手紙、面会等）
b. 物質的な援助（プレゼント、お土産、お菓子等）
c. 金銭的な援助（おこづかい、お年玉等）
d. その他

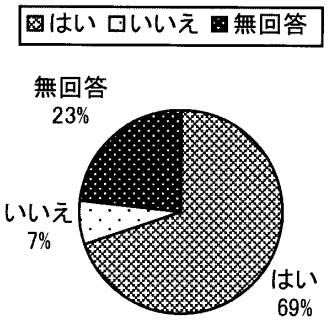
15、今の一番の悩みは何ですか？（複数回答可）
a. 自分の経済面　b. 自分の将来（老後）
c. 自分の生活　d. 子どもの経済面
e. 子どもの将来（進路）　f. 子どもの生活
g. 人間関係　h. 仕事関係　i. その他

16、ご意見、感想等ありましたらお書きください。

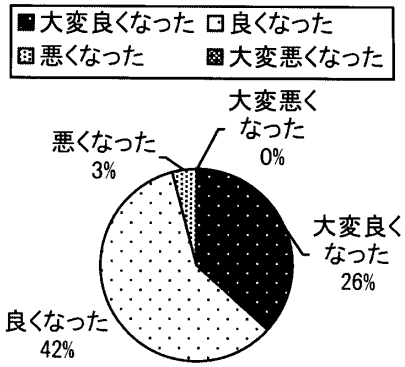
【結果と考察】

Ⅰ．結果

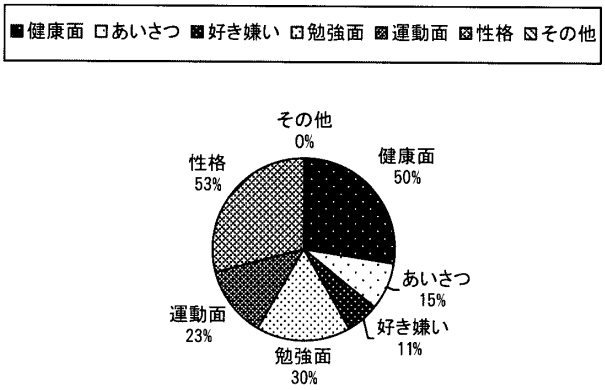
1、施設に入所する前と現在では、子どもが変わりましたか？《　はい　・　いいえ　》



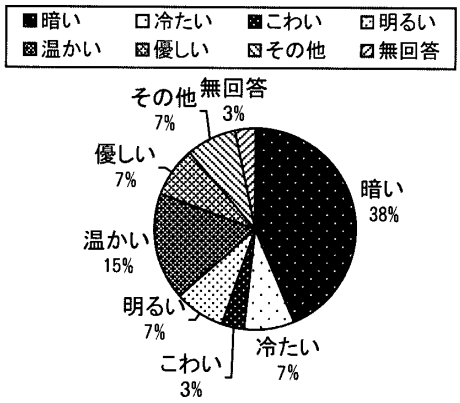
2、《1で『はい』と答えた方》どのくらい変わりましたか？（複数回答可）



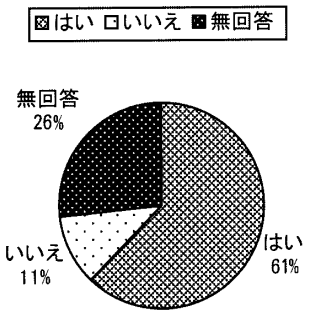
3、《1で『はい』と答えた方）》どんなところが変わりましたか？（複数回答可）



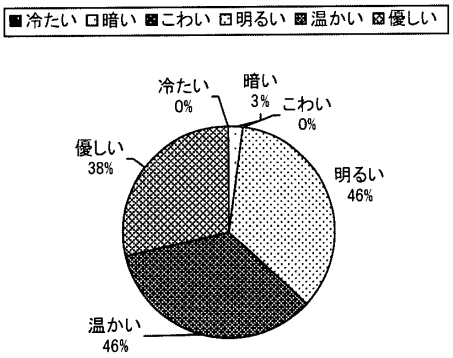
4、入所前は、施設に対してどんなイメージを持っていましたか？（複数回答可）



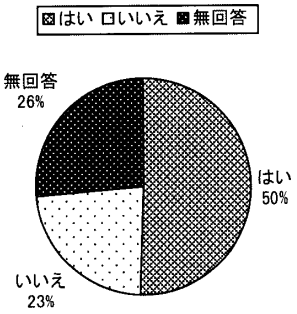
5、入所後、施設に対してのイメージは変わりましたか？《　はい　・　いいえ　》



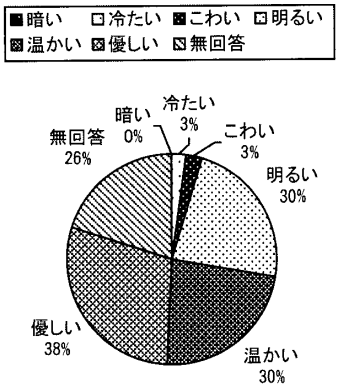
6、《5で『はい』と答えた方》どのように変わりましたか？（複数回答可）



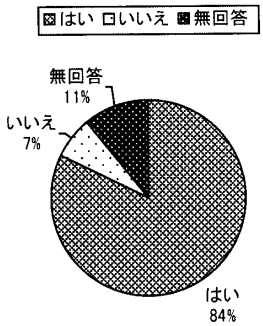
7、現在、職員に対してのイメージは入所時と変わりましたか？《　はい　・　いいえ　》



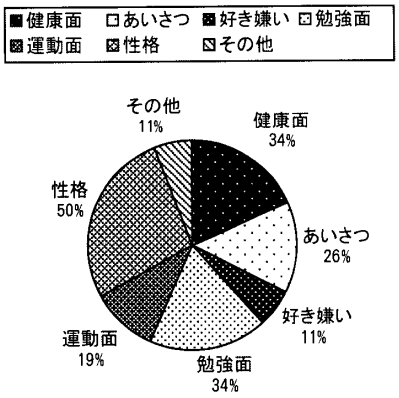
8、《7で『はい』と答えた方》どのように変わりましたか？（複数回答可）



9、子どもに期待する事は何かありますか？
《　はい　・　いいえ　》



10、《9で『はい』と答えた方》あるとすれば何ですか？（複数回答可）



11、学園や職員に望む事は何ですか？
（ご自由にお書きください）

＊　都会に就職するにあたり、方言や都会との差を教えてあげて欲しい。自分たちが特別な環境ではないと認識させて欲しい。中学から兄弟だけで暮らし、アルバイトで生計をたてていた子どももいます。

＊　良くしていただいているので特にありません。

＊　思いやり、感謝ができる心を育てていただきたい。

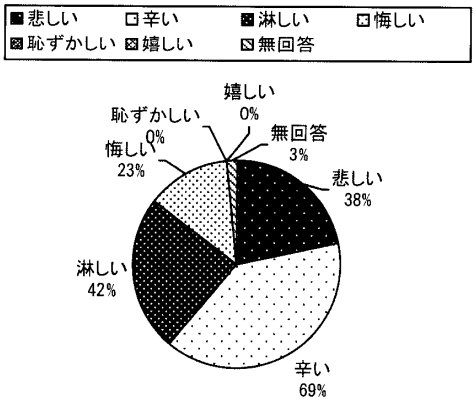
＊　子どもの自主性を伸ばして温かく見守って欲しいです。悪いことをした時など、きちんと子どもが理解できるよう説明をしていただきたいです。

＊　感謝の気持ちでいっぱいです。

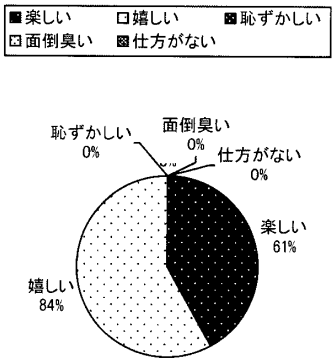
＊　このまま子ども達を見守ってください。

＊　学園での様子をどんな事でも教えていただきたいです。私たちに出来ることはどんな事があるのか、分からない所もたくさんあるので、アドバイスをいただけたらと思います。

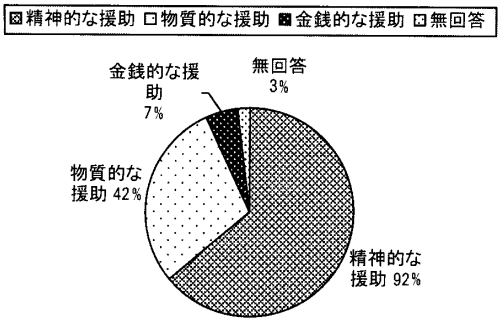
12、お子様を預ける時の気持ちは、どのようなお気持ちでしたか？（複数回答可）



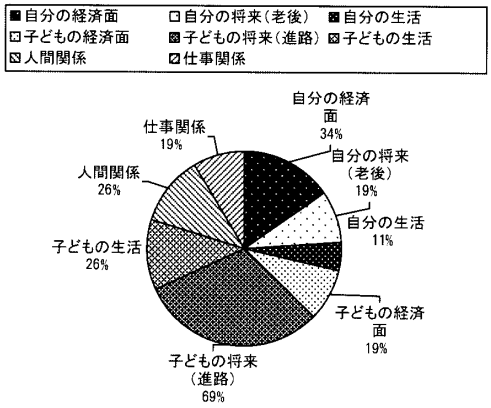
13、面会をされる時のお気持ちはどうですか？（複数回答可）



14、子どもにしてあげたい事は何ですか？



15、今の一番の悩みは何ですか？（複数回答可）



16、ご意見、感想等ありましたらお書きください。

＊　資格を取る事の大切さを教えてあげてください。自分は嫌な人だけど、人よりはかわいそうと自分で思っているのでは…自分は特殊なのでは…自分でこんな風に思ってしまうと人生に負けてしまいそう。施設で育っても家庭で育っても、同じ人間だと思って堂々と生き抜いてください。

＊　私自身がまだまだ成長段階の為、わがままな事ばかり言い申し訳ないと思っています。会う度に成長している娘を見ると、嬉しい反面、取り残されているような気分になります。が…娘に添うように成長できたらいいな！と思えるようになりました。今後もご助言等いただけたら嬉しいです。よろしくお願いします。

＊　日々たくさんの子ども達を預かり一人一人の子どもさん達に体力も心も注がれ大変だと思います。子ども達が健やかに育たれることを心より望んでおります。

＊　先生方の言葉づかいが気になります。言い方もきつい時があります。出来ればもう少し優しい口調で本当に思いやりを持って子どもと接してもらいたいです。

＊　今後ともよろしくお願いいたします。

＊　自分以上に、母親父親になっていただいている事が自分や子どもに対してとてもありがたいと思いますし、又自分にも子どもにもすごく勉強させられる事もあり、今の気持ちの中では何も望む事もなく、毎日が過ごせると言う事がありがたいと思っています。

＊　親として接してやれないだけに、職員の方々には大変感謝しております。良いと思った事はどんどんご指導ください。

＊　今は小学生ですが、大学まで出る場合どうなるのか心配です。10年以上ここにお世話になっていますが、皆さんいつも明るい挨拶が出来る方たちなのでとても安心しています。

＊　多感な年齢です。精神面支援、よろしくお願いいたします。

＊　本当にいろいろありがとうございます。

＊　子どもを預けて8ヶ月になります。本当に明るくなって学園にもとけ込んでくれたので、とても嬉しく感じています。学校、学園生活を先

生方にお願いして、私に出来ることは、手紙で子どもを励ます事くらいしか出来ませんが、短い文書の中に自分の愛情をいっぱい入れたいと思っています。この学園の中でみんなに愛されて成長する我が子を、とても頼もしく思っています。これから大切な時期を迎えますが、どうか先生方の優しさに包まれてたくましく育ってくれる事を心から祈っておりますので今後ともよろしくお願いいたします。

＊　学園に預けて私は正解だったと思う。預けずに家族4人暮らしていたらたぶんこの世には生きてはいないと思った。職員の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

Ⅱ．考　察

①～⑧の質問では、子どもの変化と施設・職員のイメージの変化について聞いている。

入所後の子どもの様子を聞くと、大半が何かしら良くなったと感じている。

施設のイメージも暗いや冷たいと言ったイメージから、面会等学園に来ることが多くなるにつれてそれも払拭され明るくて優しいイメージに変わっていく。それは施設自体だけでなく、職員へのイメージも同じ結果となった。一緒に子どもを見ていきたいと言う思いのすり合わせをすることが伝わり、変化を持たせるきっかけになったと感じる。

⑨、⑩では、子どもに期待する事の質問がされている。

9割近くが、自分の子どもに対して何かしらの期待を寄せている。挙げた項目以外にでも、例えば、集団の中で自立心と協調性をつけて欲しい。信頼関係の大切さを感じられる大人になって欲しい。友人との付き合い方を身につけて欲しい。社会生活がきちんと出来る様になって欲しい。と言った具体的な保護者の期待が書かれていた。子どもと毎日生活できるているわけではないが、ただ子どもにはこうなって欲しいんだと言う親の期待（思い）こそ、私たち職員が大切にしていかなければいけない基本だと思う。

⑫は率直に子どもをあずける時の気持ちについて聞いてみた。どの保護者も子どもをあずける時の気持ちは、辛く悲しいと言う思いでいっぱいである。一緒に住みたい、生活したいという思いの中で、やむを得ず入所となる場合、職員側もその保護者の思いを汲み取った応対が必要となる。辛い、悲しいと言った意見が多い中で、一方では『施設にあずける事で、内心安心した』と言う意見があった。まずは、自分たちの生活の立て直しをはかる事、それが安定した子どもの養育へとつながっていくのだと言う親の正直な思いだと感じる。安心＝信頼と言う言葉の裏返しであり、施設職員はこの期待に応えられるような関わりが必要となってくる。

⑬は面会時の保護者の気持ちを聞いている。やはり子どもを思う保護者の気持ちは大きく、面会や外出、帰省などはとても楽しみにしてくれている様子がよくわかる。何も父母だけがその様な気持ちなわけではなく、子どもを取り巻く全ての大人が子どもと会える事を楽しみにしている。そして、この時の思い、感覚を大切にしていく事が、家庭復帰（子どもの為に何とか頑張ろう）や早期の家庭引取りにつながっていくのである。

⑭は子どもにしてあげたいことの質問である。おおまかに3つに分けているが、その具体的な内容は、

精神的な援助：電話・手紙・面会等
物質的な援助：プレゼント・お土産・お菓子等
金銭的な援助：おこづかい・お年玉等

となっている。

保護者の方は、日頃は何もしてあげられないと言う思いから、会った時ぐらい出来る事は何でもしてあげたい…と言う気持ちが多く感じられる。しかし、施設と言う集団の中では、全ての子どもにそういった大人が存在しているわけではなく、もちろん面会に来る事のない親もいる。親がいる子だけ物が多くて面会のない子どもはそれが少ないといった淋しい思いをなくすために、保護者の方の気持ちは尊重しつつ施設の生活と言うものが背景にある事を理解していただいている。

私たちが保護者の方に伝えている事は、面会に来てくださる事ももちろんありがたいですが、無理なようでしたら、手紙や電話だけでもいいです。『私たちもあなたを見守っているよ』と言うサインを送り続けてくれれば、子ども達はきっとそれに応えてくれます、と……。

⑮は、保護者の方の今の悩みについて質問した。

自分の生活（経済的面、老後等）について心配されている保護者の方も多いが、やはり子どもの進路についての不安が圧倒的に多い結果とった。不景気な世の中、高校への進学率が98%を超える時代にそこに付随してくる子どもの能力的な問題、進学・就職するための金銭的な問題等、不安に感じる事が多いためだと思う。この不安は保護者だけが感じているわけではなく、直接生活している職員がもっと現実的な場面で不安を抱えている。お互いの立場からその思いを打ち出して、少しでも解消していく為に努力していく事が保護者と私たちの信頼関係を築く土台となるのである。

5　子どもの自立への支援

私たち施設職員は日常の関わりからアフターケアまで生活すべてにおいて、子どもとの関わりが主体となってくる。子どもが安定した生活を送れるように、また、自分の将来（夢）に向かってより良い生活が送られるように支援していく必要もある。

高校卒業後の進路については、90%以上が就職を決めて卒園していく。後は、短期大学進学や専門学校への進学などであるが、後者は金銭的な問題が必ず関わってくるため、なかなかその門戸は開かれにくいのが現状である。

私たちでも高校卒業してからすぐ社会にでる事の不安は少なからず感じている。子ども達は、その何十倍もの不安や、怖さを感じているのではないか。施設と言う集団生活の場から、今まで体験した事のない社会へと飛び込んでいく勇気や慣れた集団生活から１人の生活になる事の不安を少しでも軽減してあげるために、施設生活の場を離れ、社会体験をしていく取り組みも行っている。それが、自立援助ホーム（自立棟）と自立支援講義である。

Ⅰ．自立援助ホーム（自立棟）について

約10年前に当時の職員寮を改築し、高校生を対象とした自立援助ホームを開設した。

１階には職員の部屋と談話室、食堂を含め５部屋、２階には子どもの居室が５部屋とそれぞれ各階にお風呂とトイレがついている。

基本的に高校３年生男子が対象で、自立を考えていく上での生活の規則等は、学園に則しながら指導員と決めていく。男子ばかりの生活は食生活がいい加減になりがちだが、保育士にも助言をしてもらい食事の作り方、食材の保存方法にいたるまで教えてもらう。

指導員と生活はしているものの、学園に勤務している時は子ども達だけの生活になってしまう。子どもの行動や生活が見えにくくなる部分があるが、自立棟に入寮する前に意識付けとして何度も話し合う機会を持つ。しかしどうしても、気の緩みや思いの違いから問題行動が出てきてしまうこともある。そう言う時は、自立の意味をもう一度見直すとともに、自立棟で生活していく事の意識を再度確かめるところから始まる。

自立棟の生活は、単に生活体験だけが目的ではなく、自分の時間をどのように有効に使うかを考える期間だと感じる。本当に１人になった時に、

自由な時間が増えた時に、今までは“誰かがそばにいてくれる”と言う思いがあり何かしらの刺激はあった。それが自立棟に入ることで１人の時間が多くなり、その時間をいかに有効に使えるかを考える時間にしたいと思う。

また、自立への意識付けとともに、そこに住む職員との関係を深めると同時に、職員自身の生活を見せる事で本当の意味での『生活』を身につけていきたいと考えている。そのためには、職員自身が手本となれるような生活をしなければいけないし、子どもとの信頼関係をいかにうまく作るかが大切になってくる。

Ⅱ．自立支援講義について

先述したように、自立棟のような取り組みは男子高校生だけでなく、女子にも必要であることは言うまでもない。現段階では、居住面や職員配置などのハード面の整備がもう少し必要なために、実施までは至ってない。

生活体験と言うよりは、自立に向けての意識の高揚を目的とした取り組みが、この“自立支援講義”である。

３年程前からの取り組みではあるが、内容としては、高校３年生男女を対象に１月下旬から３月までの期間内で、1〜2時間の時間をとって講義をする。場所や内容は講義を持つ職員が自立向け

て、こんな意識を付けてもらいたいと言う項目からピックアップしてもらい実施する。事前に内容の検討会などは行うものの、比較的自由なテーマで行っている。机上の講義ばかりではなく、市役所やコミュニティーセンターに行き、住民票の取り方や転出・転入届けの出し方などの言わば“実地訓練”も行う。

又、外部から講師の方を呼んで講義を持っていただく事も行った。日頃接している職員とは違うので、緊張感もありよい刺激になったように感じる。

自立に向けて、伝えたいと思う事は山のようにある。それが日常生活に反映されるものなのか、意識レベルで考えて行く事なのかは難しいところではあるが、いつかはこの講義が、子ども達の生活に役立てればと感じている。

『自立』と言う大人の感覚からも難しいこのテーマについて、子ども達との関わりの中から、少しでもその意味を見つけ出せたらいいと思う。

6　考　察

児童養護施設として専門家との連携の大切さと難しさが、今回の研究から理解できる。施設での保護として生命の保持や保健衛生での留意を含めた世話、また、学習面を考慮した教育を園長はじめ指導員や保育士、看護師、調理師といったスタッフの協力はできる。しかし、医学的な面で精神的なことに関して治療を含めた時、素人判断できないので専門家との連携が必要なことは言うまでもない。そのような時に子どもの状態に適しタイミングよく連携しなければならない。しかし、その場合に診断をするだけでなく、施設の目標や方針などを理解して適切な助言ができる医者が必要である。

指導員のケースからは、卒園した後のケアーの困難さと、一人ひとりの生き方に適した援助の大切さが福祉施設の職員として要求される。又、学園で生活をしている乳幼児や児童に対して指導する際、失敗をどのように体験させるかという大きな課題を意識している。乳幼児が失敗した時に周囲にいる指導員や保育士などが「受け入れてしまう、全て許す」といった触れ合いは、わがままになったり、我慢できない生き方となり、将来困難に出会ったときに自分で切り開いていくという生き方ができないという疑問である。このような場合に、学園における園内研修や園長からの目標や方針の説明の徹底が必要である。例えば、子どもの発達について理解を共通に持っていなければ、指導する時にバラバラになってしまうということで、子どもが混乱しないような共通の援助が必要となる。

保護者の意識調査からは、児童養護施設のイメージとして入所前は「暗い・冷たいなど」のマイナスのイメージを持っていることが理解できた。しかし、入所により子どもが変化した事、特に「良くなった」と多くの保護者が捉えていることは重要である。実際に性格面や健康面、勉強面など面会に来た時や帰省した時に良い方向に変わっていることで、入所させてよかったと言う思いになっていると思われる。これらから施設での職員の応対する態度、子どもを愛する養護態度を保護者に更にオープンにする必要がある。又、面会の時に一人ひとりの児童の発達について「ここが成長しました」と言う「説明」を具体的にすることにより「保護者は、この子を産んでよかった。授かってよかった」と言う思いになるのではないだろうか。

今回の研究から保護者のイメージが変容する事が理解できたが、福祉施設のイメージを「明るい、温かい、優しい、子どもを大切にしています」と言った広報のあり方が見直される必要がある。

7　今後の課題

今回はM学園と言う施設を通しての研究であったが、他の福祉施設に関係する保護者の意識調査を通して比較する。また、職員の乳幼児や児童に対する働きかけや、保護者への対応に対する意識調査を通して物的環境や人的環境の見直しをしたい。また、乳幼児や児童への援助のあり方としての実態と課題について探るのも重要といえる。

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 26, 2004

Program to Improve the Staff of Welfare Institution for Children

— Studying to Improve M Children's Home by Considering the Present Situation and Problems—

Iida, Kazuya* Yokogawa, Kiyoshi** Fujita, Tetsuya**

最近の乳幼児を取り巻く環境は「子どもにとって幸せ」という状態では決して言えない。大人が子どもを殺したり、虐待したりする悲惨な事件が日本中で起きている。そのような中で福祉施設の果たす役割は重要である。しかし、子どもを預ける保護者が施設に対するイメージの持ち方は、預ける前はマイナスのイメージであったが入所後は良いイメージを持つようになった。それは、子どもが入所したことで少なくとも「良い方向」に変化していることであった。しかし、施設の関係者と医者など専門家との連携の困難さや重要さも理解できた。また、職員の指導のあり方で子どもは「生きている喜び」や「生きていたい」と言う意欲をもつことができる。M学園の運営方針や事例を検討したことで福祉施設として職員の指導の現状と課題が理解できた。さらに、保護者の意識調査を通して今後どのように保護者に対して対応するか見直す視点となった。

キーワード：福祉施設，イメージ，意識調査，指導員，保護者

* *Nagoya Ryujyo (St. Mary's) College*
** *Muginoho Children's Home*